
An important person (改訂版)

折原奈津子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

An i m p o r t a n t p e r s o n （改訂版）

【Nコード】

N 4 4 4 2 V

【作者名】

折原奈津子

【あらすじ】

高木綾乃、27歳。

バツ1、子無しの一人暮らし。

22歳の時に大法螺吹きなオトコと知らずに結婚した世間知らず。そいつのせいで背負った借金は大金で、離婚後はとにかく必死に働く毎日。

突然の電話と訪問者のおかげで、何もかもが変わっていくとは思わずにいた。

プロローグ（前書き）

以前連載していたお話の改訂版です。
エピソードを増やしたり、校正をかけたたりしつつUPしますので、
かなりの亀更新になると思います。
よろしくお付き合いくださいませ。

プロローグ

「匠、女の子はね守ってやらんといかんのよ？　どんな理由があつても、お腹をぶつたりしたらだめなんよ？」

それは、当時まだ4歳だった義理の息子に言つたセリフ。

あたしは1つ年下の人と入籍したばかりで、その人には離れて暮らしていた4歳半の息子がいた。

匠は実の母親には生まれてすぐに手放され、父親の実家で育てられていた。

その日も1つ年下の従妹と喧嘩になり、たまたまお腹をぶつてしまったところに居合わせた。

匠の父親と知り合ったのは東京の小さなバー。

熱烈なアプローチを受け、付き合いたしたけれど…彼の実家にはもう誰もいないんだって聞かされていた。

年の離れた姉と、妹がいるとだけ聞いた。

それでも上京してからは、疎遠になつてゐるんだって。

早く家族が欲しいからと、早いうちに入籍を済ませた。

あたしの両親は手放しで喜びはしなかったけれど、それでも祝福はしてくれた。

半年ほどした頃に、実家だったところの近くに住んでいるという、年の離れた姉のところに行こうと誘われた。

そして彼の故郷である西日本の、桜の名所でもある有名な橋がある街から程近い小さな町に向かった。

広島まで新幹線で向かつて、そこからは在来線に乗り換える。

瀬戸内海の傍を通る、単線に乗り換え辿り着いた小さな町。
そこには彼の両親も…そして息子の匠も存在していた。

「どれだけ嘘を言えば気が済むの!!」

当然だけれど彼、貴史^{タカシ}に詰め寄った。

一つ年下の貴史は、あたしと同年の元妻との間に匠が生まれた。
生後半年程で育児ノイローゼのために家出をし、実家に戻ったとのこと。

街育ちの彼女には、何もない、知り合いもない場所での子育てが
苦痛すぎたらしい。

…その町はすぐくのどかで、周りには何もない。

東京とは違って、平面的な風景。

彼の両親と匠が暮らしていた町営住宅のそばには、小さな川が流れている。

買い物に行くのも、みなバイクか軽自動車。

街の喧騒もなく、夜になれば街灯も少ない分真っ暗になる。

子供の頃から本の虫だったあたしにとっては、本屋に行くのにも大変な距離になるだろう。

その町に戻りたいと言う貴史に、あたしは苛立ちを隠せなかった。

「悪かったとは思ってる。でも子供がいるなんて分かったら、嫁になんてこねえだろ?」

「だからって親まで殺すか!!」

あたしの両親も、当たり前だけれど失望を隠せずにいた。

子供の存在だけでなく、両親のことすら隠していた貴史。

あたしの両親にもそう話していたから、貴史は我が家の婿養子になっていた。

とにかく弁が立つというか……完全に騙された感が強いのだ。

結局貴史はその町に戻って、姉の夫の仕事を手伝い始めた。

あたしはいえ、仕事を持っていたし、それなりに責任ある立場

だったこともあり…。

東京に残って、年に数回ある大型連休の時にその町に出向くという別居結婚だった。

そしてその結婚は…、たったの１年半程度で終わってしまった。

理由は、彼が突然姿を消したから。

元々、風来坊的な性質もあつたのかもしれない。

そこを読みきれなかったあたしにも、やはり落ち度はあるだろう。貴史に押し切られ、彼が実家のある町に戻って仕事を始めた時に、別居結婚を選択したせいもあるかもしれない。

しかも搜索願を出した結果、二カ月後に見つかったと連絡が来た。

貴史は九州に渡り、そこで知り合った女性と暮らしていた。

逃げただけでなく、女を作って一緒に暮らしている…どうしても許せなかった。

でも逆に、その程度の男なんだって諦めもついた。

……残されたものが、いつの間にか連帯保証人にされていた一千万近い彼の借金だけだったとしても。

そして…せつかく仲良くなっていた匠や義姉と、当たり前とはいえ離れなくてはならなくなっただけだ。

毎日必死に働いて、それでもどうにもならないところは司法のお世話になって…日々の苛立ちと、自分自身の男を見る目のなさに、やっと折り合いをつけ始めるまでにかかった時間は三年。

離婚してからは、通勤に便利な部屋を借りて引っ越した。

風邪をひいてベッドに潜り込んでたとしても、頼る人もいないたった一人の１LDKの部屋。

セミダブルのベッドにシンプルなパソコンデスク、四人用の小さめのテーブル。

本棚だけは大型のものを買い、その中にぎっしりと本が詰まっている。

今日も咎める人が誰もいない、自分の好きに出来る…そう信じてい

た。

連休に入ったその日、突然かかってきた携帯への電話と、そのあと突然やってきた人さえいなければ…あたしの人生はきっとそのままだったろう。

嬉しくない電話

「うー……、うつさいなあ」

昨夜は定時で仕事を終えたあと、カフェバーを営む仲間の店で食べて飲んで帰ってきた。

それは今日が週末であり、連休初日だったからというのも関係している。

だから、いつもよりちょっと強めのお酒も飲んでたし、量も多かったと思う。

でも友人たちと楽しく過ごしていたわけで、飲み方としても悪かったとは思わない。

帰宅したのは、既に0時を回った深夜のこと。

ゆっくり寝られる……そう信じて疑わなかった早朝。

眠い目を擦って、枕元の携帯を手を取った。

「……はい」

番号は……まったく心当たりがなかった。

でもつい眠気が先に立っていたので、その誰からか分からない電話に出てしまったのだ。

そこから聞こえてきた声は、忘れてくても忘れようがない人。

正直、楽しかった後には聞きたくなかった男の声。

「あ……俺……貴史」

自分勝手に出て行って、浮気して、借金置いて離婚した元夫の貴史だった。

「……何の用？ 渡す金なんかないから。逆に慰謝料払えって言いたいくらいなんだから」

かなりきつい言い方にはなったと思う。

でも仕方ないよね。

あたしは彼の連れ子だった匠を可愛がっていたし、本当に母親になりたかった。

匠には実の母の記憶はなかったし、匠にとっては初めて出会った母親だったんだから。

貴史と義姉とは一回り以上離れていたため、年老いた祖父母と匠の3人暮らしだった。

だから慰謝料も、借金も取り立てることをも、あたしは諦めてしまったのだ。

それでも季節の折には、義姉の元へだけは手紙を出していた。

離婚と共に買い換えた携帯の番号も、義姉には教えてあったのは間違いない。

なのに、彼が知らないはずのあたしの番号に電話してきたと言うことは、九州を出て実家に戻ったと言うことなんだろう。

「一言だけでも謝りたいと思ってさ」

「謝ってもらっても、あたしの人生は狂ってしまったし。許す気にもならない」

「うん、分かってる。本当にごめん。俺、もう絶対に結婚はしない。せめてもの詫びにさ、そう決めた」

「は？ ばっかじゃないの？ あんたがそんなこと出来るわけないじゃない。舌の根も乾かないうちに、また女作るから。賭けたっていいよ」

「いや、もう懲りたし」

「九州で一緒にいた女はどうしたのよ」

「あー、照美？ あいつはとくに別れた」

その女の両親が聾啞の方だとかいう話だけど、床屋を営んでいるという。

そんな家庭環境のせいかな、自立したあととはすっかり自由気ままな生活だったらしい。

だから実は妻も子もいますという状況にも「だから？ 問題あんの

？」って感じだった。

見た目は今時の可愛い子だったから、貴史もそそれたんだろう。離婚した頃には、理容師の資格を取って後を継いじゃおうかななんて名護とを言っていた貴史。

でも一緒に暮らしてみたら、家事はまったく出来ないしやらない、買い物にも自分の欲しいもの以外は行かない。

女にとって必需品の生理用品ですら、貴史に買ってこさせていて。そんな彼女に辟易して別れたらしい。

好きでやっていたくせに…と思いはするけど、面倒だから言わない。「お前は仕事も忙しかったけど、でも家の事はきちんとやってくれてたしなー、バカだったよな」

「今更泣き言を言うな。鬱陶しいから。匠だけはしっかり見てやって頂戴：あたしの心残りはそれだけだから」

「ああ、分かってる」

「あんまり信用できないけど。じゃあ切るから」

「ああ、元気でな」

「それから、匠とおねえちゃん以外はかけてこないで。あと、こっちに上京してくんじやないわよ？ 来たら刺してやるからね！」

「覚えとくよ」

電話を切ったあと、すっかり眠気も取れてしまった。

鬱々した気分を晴らしたくなって、シャワーを浴びようとバスルームへ向かった。

睡眠を邪魔された上に、それが元夫…そりゃあ気分も最悪だったの。

「あー、気分悪いし」

シャワーを浴びたあと、洗濯物を買換えたばかりのドラム式洗濯機に放り込む。

カーペットを敷き詰めた寝室などに掃除機をかけ、キッチンに向かいドリンクを作ってグラスに注ぐ。

少し行儀は悪いが、フローリングの床にモップをかけながら、手にしたグラスを口にした。

最近気に入ってよく口にする、マツコリのオレンジ割だった。
むしろくしゃしてたし、どうせ一人暮らしなのだから、誰に気兼ね
する必要もない。
オレンジじゃなくてグレープの時もあるが、癖もなく度数もきつく
ないから普段からよく飲む。
ちよつと濁ったそれは、口当たりいい割にあまり酔いつぶれる羽目
にもならなかった。

平和を乱す来客

1LDKのマンションは、それなりに家賃もかかる。

それでも職場からの家賃補助が出ているから、例え借金があっても贅沢さえしなければ普通に暮らしていける。

まだ元夫の借金も少し残っているけれど、職場の待遇もこのご時勢にしてはいいので困ることはない。

元夫の貴史よりも収入が多かったのが、きっとあの男の小さなプライドに触ることだったんだろう。

何にしても勝手なやつだ。

でもそのおかげで、普通のOLよりは早く片がつく。

けれど額が大きすぎたため司法に頼ったおかげで、あたしの法律的な信用はがた落ちだ。

そんな事を考えながら、あたしは2杯目のグラスを口に運んだ。

不意にインターフォンが鳴った。

それは、オートロック解除を求めるものじゃない。

直接的な、ドアの外のインターフォン。

誰かがオートロックを問題とせずに入り、この部屋にやってきたということだ。

面倒だったし、すっぴんだったし：ちなみに酒も飲んでいる。

こんなお気楽で怠惰な時間を邪魔されたくはなかった。

無視をしていたら、またチャイムが鳴り響く。

「何なのよ……」

仕方なくドアを細めにあけてみる。

「誰？」

ドアの隙間から顔を見せたのは、よく知っている顔だった。

「せ…専務！？」

そこにいたのは、あたしの勤務する市場ではかなり大手に入る酒造メーカーの専務。

あたしはその会社の営業部門に所属している。

「ど、どうしてここに」

社内ですれ違うこともあるし、エレベーターで遭遇することもある。それだけでなく、去年までは営業部に在籍していた専務だから、顔もよく知っている。

入社以来、直属の上司だったこともあり、かなり世話になっているといってもいい。

「どうしてって。元部下の顔を見に来たって言ったら？」

「は？ 出社すれば見れますけども……」

「そりやそうだが、たまにはプライベートの顔も見たいじゃないか」「は？」

「とりあえず、30分やる。出掛ける準備して来い。そうだな…ドレスコードはビジネスカジュアル程度でな」

「え？ あの、専務？」

「30分だぞ、遅れるな？」

それだけ言うと、エレベーターホールへ向かっていった。突然やってきて、突然外出？

意味が分かりませんが！

しかも、あたし、昼間から飲んじゃってますけど！

ぶつぶつ言いながらも、上司を待たせておくわけにもいかず。

仕方なくメイクをして、淡いパールがかかったグレーのマキシ丈のワンピースに着替えた。

同じ色目のカーディガンを手にとると、お気に入りのキャスケット。ソンのレザーバッグを手にした。

上品な花柄の白地のバッグは、何よりもお気に入りだった。

少しヒールの低めのウエッジソールのサンダルを履くと、1つ溜息をついてエレベーターホールへ向かった。

「それで、どこに行かれるんですか？」

溜息混じりに問いかけると、助手席のドアを開けながら「着いてからのお楽しみ」と言った。

なんか胡散臭い……彼のその時のほくそ笑んだかのような顔を見て思う。

「なにか、企んでませんか？」

やっぱり何か考えがあるような気がして、そう問いかけた。

「いいや？ 企んでなんかいないよ？」

「……」

彼の運転する車がどこに向かっているのか、正直分からない。

方向音痴ではないし、専務の車のナビが示している地図の見方だつて分かる。

でも訳が分からないうちにこうして走っているから、どこへ向かっているのか見当がつかないでいた。

まさか連れて行かれる場所が、彼所有の部屋だとは考えもせず。

到着した瞬間に、呆然とそのマンションを見上げることになると思ってもせずに……。

そうして、到着した高層マンションを見上げて、あたしは口をあめぐり開けていた。

営業部での元上司にして、今では専務にまで上り詰めたこの男……しかも車は詳しくないからよく分からないけど、高級車だっていうのは分かる。

いったい何者なのだろう。

高槻亨という男

身長は…180あるかないか。

太っではないけど、上半身はかなりがっしりしている。
ん、所謂細マッチョとかいうやつ？

浅黒い肌に、淡いブルーのシャツがよく映える。

「ほら、行くぞ」

右腕を取られて、半分引き摺られる様にエントランスをくぐる。

「あ、あの！ 専務！ いたいここはどこなんですか？」

「ん？ 俺の自宅だけど？」

何か問題でも？

そんな顔つきであたしを見下ろした。

問題大有りでしょうに！！

そんなあたしの心の叫びは、このあと完璧に無視されることになる。
エレベーターが到着したのは最上階で、その階には当然のようにドアは1つだけ。

「な、なんで専務のご自宅なんですかあ……」

「なんでって、連れて来たかったから？」

「意味がわかりません……」

「意味なんて、そのうち分かるよ。おいで、綾乃」

「な…なんで呼び捨て……」

「いいから入って。ここじゃ近所迷惑だろ？」

「一部屋しかないじゃないですかあ！！」

そう叫ぶも、無理やり部屋の中に引き込まれてしまった。

部屋のインテリアは、高級ではあるのだろうが、シックな色合いで落ち着きのあるものだった。

ベージュとブルーが基調で、そこに黒系の物が配置されている。

「行き先がご自宅ならご自宅とおっしゃってください！」

そうすればここまで緊張せずにすんだのに……そうぶつぶつ呟く。

「自宅だなんて言ったら、それこそ来ちゃくれなかっただろ？」

「む……確かに」

自宅なんて分かってたら、絶対に外出する準備なんかしないのんびりマツコリを口にしながら、自宅での休日を満喫していたはずだから。

一人きりの午後つて、ちよつと一杯つていい気分なのよ。

なのに何故かあたしはこの部屋にいて、専務に促されてソファに腰掛けている。

「それで？ なんの御用であたしをここに？」

ここに来て、およそ15分。

ちなみに専務の名前は、タカツキ トオル高槻亨という。

その高槻氏が入れてくれたコーヒーを飲みながら、もうかれこれ15分経つのである。

「ん？ だから綾乃と休日を過ごしたいと思ったからさ」

「そして、なんで呼び捨てになるんです？」

「俺がそうしたいから」

「どうしてそうしたいんですか」

少々投げやりな気分で聞いてみる。

「綾乃を俺のモンにしたいから？」

「……は？」

「聞こえてただろ？ ちなみに連休中、帰す気ないから覚悟して？」

「……は？」

突如我が家に訪れた専務によって、どうやらあたしは囚われの身に

なったらしい。

そして、次に専務が口にした言葉で絶句した。

「着替えも化粧品も揃えてあるから、安心してここにいればいいよ？」

いや……こんな状況に、安心できる輩がこの世のどこにいるのか教えてください。

囚われの身なのに、安心なんて出来るわけないでしょうが……！
っていうか、その前にいつの間にかここまでリサーチされてるんでしょうか。

着替えも……ってコトは、サイズもご存知なんでしょうね……。

なにやら、寒気がしてきました。

「ああ、俺のことは役職で呼ばないように。亨って呼ぶこと」

「無理です……」

「平気平気。すぐに慣れるからね」

につこり笑ってそう言った。

あたし、いったいどうなっちゃうんだろう。

この爽やかな笑顔を見せるこの男に、何をどうされてしまうんだろう。

「それにしても、なんで突然こんな事なさるんです？」

そう、そもその疑問はそこ。

なんでこんな目にあうのが分からない。

だって会社の内外には、専務のファンはたくさんいる。

中にはちよっぴり、関わりたくないお姉サマ方もいる。

「まあ確かに、君にとっては突然だったのかもしれないけどね。俺にとっては突然じゃない」

「は？」

「気付いてもしなかったってことか？ 営業部時代から、俺は君しか見ていなかったっていうのが理由だ」

気付いてもしなかったってことか……ですって？

あたしは元夫の残した借金清算に向けて必死で働いてたのよ？
そんなの気付くわけじゃないの！！

「ありがたいお話ですけど…でも今のあたしにはそんな暇もありませんし」

「元のご主人の残した借金？」

「ご存知なんですか！ それなら…」

「それ、俺が全部立て替えるって言ったら？」

「…普通に考えれば美味しい話かもしれませんが、そんな気はな…」

「…っていつか、もう問い合わせて支払い済み」

「……はい？」

意味が分からない…今、なんて？

あいつが残した借金を、専務が払い終えた？

正直、あたしはマンションを見上げた時よりももっと、開いた口が塞がらなかった。

「な、なんでそんな勝手なことを…！」

一千万あったけど、司法に頼んだりして今の残金はおよそ半分。

あと三年頑張れば、きれいさっぱり出来たはず。

勝手すぎる！

「確かにあと二・三年頑張れば清算できたんだろうけど、その間ずっと綾乃は元のご主人に縛り付けられたままだろう？ 俺はそれが我慢できなかったんだ」

「だからって代わりに払う必要はないじゃないですか…！」

「それで三年くらいの間待って？ そんなのもう待ってられない」

まっすぐな視線があたしを射抜くかのように、すべてを絡めとられていく感じがした。

「綾乃…俺が何年お前を見てたと思うんだ？」

あたしが短大を出て、入社してからでも既に七年経つ。

結婚しても、離婚をしても、あたしはこの会社に勤めてきた。

専務が営業部から離れて四年、それまではずっと彼の部下だった。

「そんなの…知るわけがないじゃないですか……」

「……七年だよ」

「え？」

何か信じがたい言葉を聞いたような気がする。

「七年と言ったんだ。綾乃が営業に来てからずっとだ」

「え？　だってあたしはその間に結婚もしてますよ？」

「ああ、そうだな。でも諦めることが出来なかったんだから仕方ないだろう？」

「……………」

あたしが腰掛けていたソファアの隣に腰を下ろすと、あたしの手からコーヒークップを取り上げてテーブルに置く。

「俺のこと、嫌いか？」

「……そんなことはありませんが……」

見た目は悪くないし、仕事も出来る。

失敗をすればきつく叱られるけど、大きさは関係なく契約が取れると一緒に喜んでくれる。

性別関係なく信頼され、人気もある。

専務を嫌っている人がいるとすれば、何もしないくせに偉そうにしている勘違い系だけ。

「じゃあ…俺を受け入れて？」

あたしの手を取るとちよつと強く引いて、あたしは専務の腕の中に飛び込む形になった。

「せ、専務…。あの…」

「亨。もう誰にも渡さないから。これ、決定事項だからね」

「いや、でもそれは……」

「綾乃に今付き合っている相手がいないのは分かってるよ。だから拒否は受け付けないよ」

「お、横暴です！」

「横暴でも何でも、綾乃が欲しかったんだから諦めて」

そう言うと、さも嬉しげな表情を浮かべて、あたしを抱きしめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4442v/>

An important person （改訂版）

2011年8月6日10時31分発行